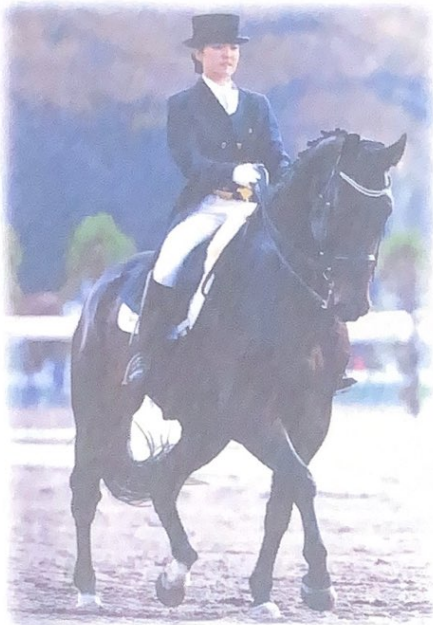


いななき 第18号

創部 90 周年記念誌



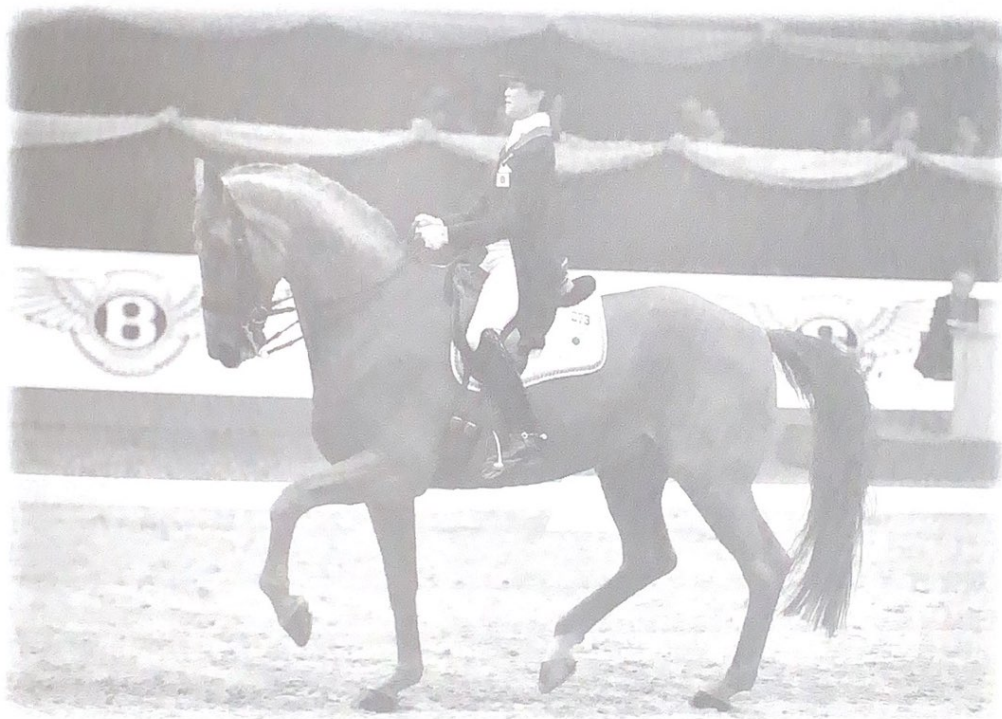
青山学院大学体育会馬術部・緑鞍会

アシエンダ乗馬学校

〒246-0025 神奈川県横浜市瀬谷区阿久和西1-6-5

TEL: 045(363)2501 FAX: 045(363)2768

<http://www.la-hacienda-yokohama.com/index.html>



平成7年卒 北井裕子



目次

第一部

皆様からのご祝辞・ご挨拶

ご挨拶

白馬の騎士に続く群れ

創部一〇〇周年をめざしていつそうの努力とご支援を

廃部の危機を乗り越えて

九十周年に寄せて

幹事長挨拶

監督挨拶

主将挨拶

高等部主将挨拶

第二部

創部九十周年 記念式典について

第三部

皆様からのご祝辞・お便り

創部九十周年に寄せて

現役の皆さんへ

緑鞍会会長 新城直樹……………1

青山学院院長 山北宣久……………2

馬術部部长 土山實男……………2

高等部顧問 佐藤隆一……………4

緑鞍会理事長 岩崎修……………5

緑鞍会幹事長 林哲哉……………6

馬術部監督 高梨文子……………6

馬術部主将 橋本治奈……………7

高等部主将 今津奈々央……………7

昭和四十四年卒 大塚まりこ……………19

平成七年卒 北井裕子……………19



当時の思い出

現役時代を振り返って

繋がり

ホースセラピーについて

初等部・中等部の取組みについて

「師」阿部先生のこと

懐かしの綱島馬場は、今

第四部

現役のページ

戦績のご紹介

馬匹のご紹介

部員のご紹介

馬匹名簿（過去を彩った名馬達）

第五部

「いななき 第一号」復刻版

編集後記

平成十六年卒 亀田 麻衣子……………20

平成十七年卒 平岩 大典……………20

平成二十年卒 中島 彩……………21

昭和五十三年卒 太田 恵美子……………22

昭和五十七年卒 高梨 文子……………23

昭和五十二年卒 林 哲哉……………24

昭和五十二年卒 林 哲哉……………26

一言メッセージ……………28

第一部

皆様からのご祝辞・ご挨拶

ご挨拶

緑鞍会会長 新城直樹

(昭和二十八年卒)



久し振りの「いななき」の刊行に際し一言ご挨拶申し上げます。
本年は馬術部創立九十周年の記念式典を行い、多数の会員皆様のご出席をいただき、誠に有り難く感謝申し上げます。

戦後の荒廃した校内に、馬を引き入れて再出発した馬術部を、今日の町田の総合馬術部厩舎として、拠点を確保できましたことは、ひとえに前青山学院理事長であられた羽坂先輩のご尽力と、当時の大塚監督並びにコーチ陣スタッフの努力、それに会員皆様方の暖かいご援助の賜物と心より御礼申し上げます。

大正十二年に習志野の騎兵連隊にて産声をあげて以来、九十年の伝統と歴史を刻んでまいりました。戦前は学生馬術界に、青山学院ありと、印象づけていたと聞いており、戦後の女子馬術連盟の発足以来は、押しも押されぬ大活躍を残して参りました。現在の部員も立派に活躍していることは、皆様方もご承知のことと思います。ただ、運動部のなかで、いきものを飼いながらそれを土台として活躍しているのは馬術部だけでございます。そのため、広範囲にわたって努力している現状を何とか援助してあげたいと、卒業生である緑鞍会の会員の皆様が存在すること、これは馬術部にとっては、何物にも変えがたい宝物だと思えます。会の運営は幹事会という無償の方々のお奉仕でまかなっており、いかにすれば現役馬術部を良きものにできるか、つねに考えをめぐらしており、卒業後も馬術部を懐かしむ心を忘れないようにしております。

幸いにして、いままで多くの会員皆様と、七十、八十、九十周年と記念式典を開催して参りました。次は一〇〇周年式典です。緑鞍会の会員皆様のお協力のもと盛大な式典となることを期待し、出来れば元気な姿で参加したいものと思っております。

私は会長として、皆様とともに、いつまでも青山学院馬術部を愛し、よりよき馬術部にするため努力するつもりですので、今後とも現役馬術部のご援助お願い致したく、よろしくお願い申し上げます。

白馬の騎士に続く群れ

青山学院院长 山 北 宣 久

馬術部創部九十周年を心から祝
します。

六月二九日の盛大な祝賀会は創
部百周年へのスタートとしてギヤ
ロップがかかった感じが印象的
でした。さらなる導きと祝福を心か
ら祈ってやみません。



主イエスの十二弟子の一人にフィリポという人がいます。フィ
リポは「馬を愛する者」という名前です。名を体として馬力ある歩
みを展開し、委ねられた責任をウマく果たしていったことでしょう。
馬術部の部員は皆それぞれにフィリポです。人馬一体、男女の
区別も差別もなく、各々の状況、場面を華麗に彩り、鮮やかに疾走
していくフィリポとしていつまでも青山学院の人々の憧れでありつ
づけて下さい。

ところで聖書の終章「ヨハネによる目次録」には馬が登場しま
す。「赤い馬」は虐殺(六章四)「黒い馬」は飢饉(六章五-六)「青
白い馬」は死の象徴となっています。そんな中主イエスは「出て来
い」との声と共に「白い馬」に跨って登場します。勝利のシンボル
として。(六章二)

そしてこの「白い馬」は一九章十一節以下に再び出てきます。

「見よ 白い馬が現れた。それに乗っている方は『誠実』およ
び『真実』と呼ばれて、正義をもって裁き、また戦われる。」

赤い馬、黒い馬、青白い馬としての虐殺、飢饉そして死が覆う
かに見える地にありて、「白馬の騎士」に付き従う騎士を輩出する
青山学院大学馬術部の存在と活躍は青山全体の望みにつながりま
す。

「誠実」と「真実」を胸に正義をもって戴き、戦いつづける騎
士の群れに幸あれ!!

創部一〇〇周年をめざしていつそこの 努力とご支援を

馬術部長 国際政治経済学部教授 土 山 實 男



九十年間馬術部を育てて下さった
方々に感謝申し上げます。

青山学院の前身である東京英学校
が青山の地にキャンパスを開いたの
が一八八三年七月だったというから、
この青山の地に本学院ができて今年
でちょうど一三〇年ということになる。その東京英学校が東京英和
学校となり、一八九四年には青山の地名をとって青山学院となつて、
キャンパスに新ガウチャーホール、弘道館、勝田ホールなど次々と
大きな建物がつくられて学院は大きな発展を遂げたが、一九二三年
の関東大震災でほとんどの建物を失い、国内外からの支援をうけて

青山学院の再建が始まった。そのときにできたのが、現大学一号館、二号館、そしてペリーホール（法人本部）などである。

馬術部が今年創部九十年を迎えたということは、関東大震災のあと青山学院が再建されるなかで馬術部もつくられたのであろう。九十年もの歴史をもつ馬術部は東京の大学のなかでもそう多くない。名門大でも馬術部のない大学もある。その理由は簡単である。

一言でいえば馬術部はお金がかかる。また馬場をおくだけの場所が東京都内ではなかなかない。馬術部をもつためには、馬がいて、馬を育てながら練習をしなければならぬ。馬術はただ速さや強さを競うだけではなく、人馬一体となって美しさやマナーを競うところがあるから、スポーツとはいっても、単なるスポーツではない。そういう意味で、馬術部は贅沢なプログラムである。しかし、関東大震災の混乱のなかで、この贅沢こそ青山学院の教育に相応しいと馬術部を青山学院につくった本学院の先達は考えたのであろう。

馬術部長で国際政治経済学部長をされていた高森寛先生に、しばらくでいいからと頼まれて、馬術のことは何も知らずに馬術部長をお引き受けしたのが、馬術部創部八十周年の一年前だったように思う。その頃、相模原に新キャンパスをつくる計画にともない馬術部の馬場が綱島から横浜市に移ったままだったので、新しく馬場をつくる必要があった。その後、私自身が国際政治経済学部の学部長や副学長を仰せつかったので、なかなか馬術部長としての仕事ができなかったことをまことに申し訳なく思っているが、この間、町田市小野路に青山学院がグラウンドを購入して念願の馬場の建設が

二〇〇五年から始まり、翌二〇〇六年四月九日に、深町正信院長、松澤建理事長、武藤元昭学長ら大勢の関係者がお見えになって、その落成式が行なわれた。この馬場の建設は多くの方々のお力添えによるものだが、とくに馬術部のOBで、長年理事長を務められた羽坂勇司先生のご尽力が大きかったものと思われる。当時の大塚まりこ監督からも細かいご指示をいただいた。改めて感謝申しあげたい。

新しい立派な馬場ができたことも手伝って、一時期心配された部員数の減少にも歯止めがかかり、いまでは約二十名の部員数を保っている。部員はいろいろなところから入ってくる。スポーツ推薦で入ったものもわずかにいるが、一般入試で入学して大学に入ってから馬術を始めるものも多い。また、今年の主将の橋本治奈のように幼稚園から青山学院で育ち、高等部で馬術をやって大学にあがってくるものもいるし、留学生もいる。しかし、馬術部の成績は悪くない。今年は、第五〇回東都学生馬術大会で総合第三位となり常陸宮妃殿下から表彰状をいただいたのを始め、関東学生馬術新人競技大会の障害で丹野里香が第二位、関東学生馬術女子選手権で橋本が第四位、全日本学生馬術三大会で同じく橋本が第六位に入っている。これはもちろん学生の努力の結果でもあるが、指導されている高梨文子監督や、高柳徹三、斉藤久絵両コーチらのお蔭である。

この六月に開催された馬術部創部九十周年式典には、山北宣久院長、安藤孝四郎理事長、羽坂勇司元理事長を始め多くの青山学院・馬術部関係者の方々にお越しいただき、院長、理事長からはご祝辞を頂戴した。この式典を企画運営された新城直樹緑鞍会会長を始め

緑鞍会の皆さまのご協力とご支援に対して、この場をお借りしてあらためてあつくお礼を申しあげます。

創部一〇〇周年がいよいよ十年後に迫っている。これから、馬術を通した国際交流などいろいろな私たちの馬術部の活躍が期待される。九十周年式典の挨拶のなかでも述べたように、今後とも馬術部関係者が一丸となって馬術部の発展に努力しご指導していただくことをお願いいたしますとともに、皆さま全員で馬術部創部一〇〇周年を祝って下さいますようお願い申しあげます。

廃部の危機を乗り越えて

高等部顧問 佐藤 隆 一



通しが出てきた。

しかし、ふりかえってみると、最近の馬術部は部員不足によって、たびたび廃部の危機にさらされている。特に、町田馬場がオープンした翌年の二〇〇七年四月の段階では、馬術部は三か年連続で部員

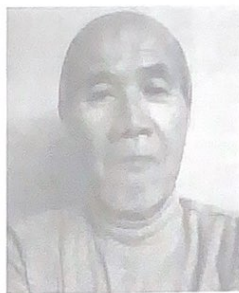
数が八名を割ってしまい、クラブ委員会の規定により、廃部処分という流れになった。ところが、現に少数ながら日々一生懸命練習に励んでいる部員がいるなかで、私は何とか特例措置を講じて廃部は一年延ばしてもらいたいとクラブ委員会に強く要請した結果、特例として教員会議で採決を行うことになった。部員たちも、必死の思いでクラブ委員会に部存続の嘆願状を書いた。幸い、教員たちの理解が得られ、採決では過半数の支持を得ることができた。でも、本当に冷や冷やもので、危ない一瞬であった。しかし、この年の部員は驚異的な頑張りをみせて、インターハイへの出場を達成し、全国ベスト十二に入る活躍をしたことは記憶に新しい。

その後、馬術部の部員数は立ち直りを見せたものの、二〇一〇年初頭にはまた実質的に活動できる部員が一名になってしまう危機的状況となった。そこで、新年度には部員・コーチ・大学生部員と私も含めて、一丸となって馬術部のPRに努めた結果、一〇名の新生部員を獲得することができ、以後今日まで安定した部員数を維持することができている。こうした事態にかんがみて、最近は一〇名や卒業生や大学生部員の皆様のご尽力により、初等部生や中等部生を対象とした、町田馬場における初心者向けの試乗会を開いて下さっているのも、大変ありがたい。

これから私たちは、青山で、そして町田で、積極的に馬術部の楽しさや充実ぶりをアピールすべく、広報活動や試乗会などのPR活動を行うことが何よりも大切であると痛感している。

九十周年に寄せて

緑鞍会理事長 岩崎 修
(昭和三十六年卒)



八十周年に実行委員として関わったのが、つい最近のように感じる九十周年となりました。振り返ると私には変化の多い特別な十年となりました。二〇〇五年の総会で新城会長からいきなり理事長の指名を受け、考慮の暇もなく内藤先輩の後を引き受けることになりました。任に非ずですがお受けさせていたゞいたのは長年のお付き合いからの親近感と敬意によるものです。翌年二〇〇六年には綱島馬場を離れて五年、漸く実った町田新馬場開設です。想像以上に充実した施設で感激しました。その後二〇〇七年は青木昇先輩、羽坂勇司先輩米寿のお祝いの会、二〇〇八年北井裕子さんの北京オリンピック出場等祝事が続きましたが、一方では青山学院そして馬術部を心から賞された青木昇名誉会長、熊本へ融資でお訪ねした米谷浩志先輩、一年後輩ですが高等部からの親友、堤義則君を失いました。今も心に残る方々です。町田の新馬場がスタートし部活動の環境は整いましたが、一方部員不足が深刻化し部活動に支障を来たす心配があり、監督コーチ団には部員募集策を検討していたゞき緑鞍会として馬術部の今後の活動方針をあらためて学校に理解していたゞく為現状と今後の活動方

針として報告書(二〇一〇年)を提出しました。競技成績向上に努めることは当然ですが、こゝでは学生本来のクラブ活動イコール課外活動を意識し、初等部中等部の生徒に馬を親しんでもらう乗馬会の開催、一般学生への啓蒙活動、地域社会との交流、ボランティア活動等を提示、早速にいくつかは実行に移しております。今後も課外活動の精神を忘れず視野を拡げた活動を続けてまいりたいと存じます。

部員募集活動はホームページ他情報発進の場を拡げたいと監督コーチ団の努力が実り、今年二〇一三年は二〇名を越す在籍となっております。

今年二〇一三年の初乗り会に参加した際、現役の生き生きとした活動振りを目にし、とても嬉しく頼もしく感じました。緑鞍会員の方々にも是非馬場に又馬事公苑での競技会に足を運んで現役の活動を支援していたゞき、ご自身も暫し若返りの時を持たればと存じます。

私自身百周年に向ってどんな人生の展開をみせるのか知る由もありませんが、緑鞍会・馬術部を頭に置き乍ら日々が過ぎて行くような気がします。



夏目憲伸くん(6歳)作
平成5年卒 夏目(旧藤森)香織様ご子息

創部九十周年を迎えて

緑鞍会幹事長 林 哲哉
(昭和五十二年卒)

この度、創部九十周年を迎えることが
できました。歴史の重さを改めて感じて
おります。

歴史を紡いで九十年。一言では言い表せ
ない幾多の物語があつたことと思いま
す。諸先輩のDNAを更に引き継いで行

きたいと思えます。

さて、私たちのパートナーである、ウマ。幾つもの側面を持つこ
の動物は、考えてみますと、様々な分野に亘って私たちに色々なこ
とを提供して貰っている、多彩な動物であることがわかります。童
謡に、民謡に唄われ、民話や寓話として親しまれ、軍事はもちろん、
農耕に、林業に使役され、スポーツ、ギャンブルは言うに及ばず、
絵画や彫刻の題材となり、凛々しい騎士の騎馬像となり、欧米では
警察業務に就いている。またその身は食され、皮はカバンや身の回
りの小物となり、尾はブラシにその身を変えらる。更に我が国におい
て、死してはその魂は観音様として祀られ、信仰の対象となる。こ
れほど多様な顔を持つ動物はウマのほかは、思い当たりません。

我々が愛して止まないウマ。そしてその延長線上にある馬術。残
念ながら、一般にはまだ馴染みの薄いスポーツですが、もつともつ

と一般の方々に知って貰いたいものだと思います。その一環として、
と言つては大げさですが、三年ほど前から「ALL A O Y A M A」
として取組んでいる事業があります。初等部と中等部に年一回、半
日ずつ馬場を提供し、ウマに親しんで貰う活動をしています。その
中から高等部の馬術部に進んだ人もいます。こういう地道な活動を
通じて次の十年に紡いで行けたら、と考えています。OB・OGの皆様
の今後の有形無形のご支援をお願いするものであります。

最後になりましたが、発刊にあたりまして学校関係者各位を始め、
多くの方々から様々なご援助を頂戴致しましたことを、心から御礼
申し上げます。

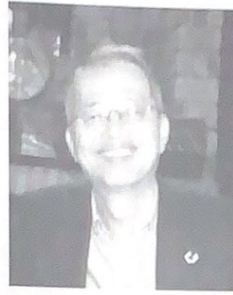
監督挨拶

馬術部監督 高梨 文子
(昭和五十七年卒)

日ごろは、馬術部現役の活動に、ご理
解とご支援をいただき心より感謝申し上
げます。

また、本年は創部九十周年記念式典を盛
大に催していただきまして、この年に監
督として馬術部に関われますことを大変光栄に思っております。

私が、前監督よりコーチとして監督会に加わるように頼まれて、
馬術部に通い始めたのは、二〇〇六年に馬場が町田市に移転して二
年が過ぎたころでした。立派な設備の整った厩舎や静かな環境の馬



場で人馬ともに活動ができることを幸せだと思いました。

しかし、現実は大変厳しく、キャンパスから離れた場所での課外活動、勉学との両立の難しさから、さらに残された部員の負担が大きくなることから、部員が極端に減少し、体育会としての活動が難しくなるような状況になったこともありました。

そんな時、大学側のご理解、他大学馬術部や馬術界の皆様の励まし、そして何より緑鞍会の諸先輩方のご協力により、現在は大学生部員十九名、高校生部員十一名、繋養馬匹十五頭の活動ができるようになり、馬場も活気あふれるようになりました。

そして、それとともに競技会での戦績も上がり、部員たちの努力の成果が出てくるようになりました。本年は、東都学生春季大会で団体三位となり、また、関東学生馬術大会では馬場馬術競技で団体五位、さらに全日本学生馬術大会に障害二人馬、馬場二人馬が出場できることとなり、全日本学生賞典馬場馬術競技では、個人六位入賞の好成績をおさめることができました。

創部の時より、大先輩の皆様方が受け継いでこられた、馬を愛する心、人を思いやる気持ちがつながって、今日の馬術部があるのだと実感しております。今後も、一人一人の存在を大切に尊重し、大事なパートナーである馬を慈しみ、飼育していくことで、さらなる目標に向かって毎日、練習に励み努力してまいりますので、ご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

主将挨拶



主将 橋本 治奈

今年度、主将を務めさせて頂きました、教育学科四年の橋本治奈です。創部九十周年という大きな節目の年にあたりますことを大変光栄に思います。

ここ数年、部員の数が少なく、監督やコーチの方を始め、OB・OGの方々日々支えて頂きながら、少ない部員で何とか部を運営している状態が続いていました。しかし少しずつ部員が増え、今年はいよいよ高校一年生から大学四年生までの七学年全てが揃い、一般生主体の賑やかな部活になりました。

これから少しずつ学生戦で団体を組んで、個人だけでなく団体成績も残していきたいと思っておりますので、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

高等部主将挨拶



高等部主将 今津 奈々央

高等部馬術部は週二回、土曜日と日曜日に大学生の方々と一緒に町田グラウンドで練習しています。練習と作業は基本的に午前中、午後は当番制で馬の世話や道